

精神神経学雑誌の脱皮と衣替え

大森 哲郎 Tetsuro Ohmori
精神神経学雑誌編集委員会委員長

精神神経学雑誌を1999年以来22年ぶりに衣替えいたしました。誌面を従来よりも一回り大きいA4変型判とし、表紙は和柄を基調としています。色調はこれまでの表紙を踏襲して翡翠色とし、そこに黄金色を加えています。唐草模様、千鳥格子、青海波、大波、鮫小紋、矢絣、霞などさまざまな紋様の円は、精神科医だけでなく多職種の関係者や当事者をも含めた個性豊かな構成員によって成り立つ私たちの学会を表しています。また、生物・心理・社会の次元にまたがるさまざまな思想と方法と治療技法とが流れ込んで成立する精神医学の独特の在り方をも象徴しています。それらの多彩で多様な円が集まってひとつの輪となり和をなして、私たちの雑誌が形成されます。雑誌タイトルの書体は藤原定家の筆跡をヒントに考案された「かづらき」です。また、巻頭言に始まり、総説、原著、特集などを経て編集後記に終わる各ジャンルには、それぞれに似つかわしい紋様をモチーフとしたデザインをあしらっています。

もちろん和柄を纏ったからといって、ナショナリズムに傾く意図はまったくありません。日本文化は、大陸、半島、南方、北方さらには西洋由来の文化の影響を受け、それらを包摂しながら独特の発展を遂げてきています。表紙に散らばるさまざまな円は、日本に流入する異種文化、多彩な土着性と地域性、移民や少数民族の存在をも表象しています。異種性と多様性への目配りは欠くべからざることです。新たな発展の種子ともなるものです。

思うに和柄は国際的に通じる発信力を秘めています。東京オリンピックのエンブレムは、1964年は琳派を想起させる金色文字と日の丸のデザインでしたし、新型コロナウイルス感染症パンデミックのために延期となった2020年は藍色の変形市松模様です。どちらも伝統的でありながらも斬新であり、力強く明快なメッセージを放っています。精神神経学雑誌の新たな表紙は編集委員会と出版社とデザイナーが意見交換しながら作り上げたいわば手作りのデザインであり、オリンピックエンブレムのインパクトと芸術性には比べるべくもありませんが、余白の扱いを工夫し、

シンプルな形の繰り返しによって美しさを表現しようと努めました。ドメスティックでありながらもインターナショナルに通じる内容と水準でありたいという願いを強く込めています。

編集委員会ではここ2~3年にわたり雑誌の改革に取り組んでまいりました。症例報告の本人同意を原則化し(2018年4月)、掲載論文の1年後のWEB上一般公開を進め(2019年4月)、雑誌の編集基本方針を新たに決めました(2020年1月)。さらに投稿規程を見直し(2020年5月)、会員に限定していた投稿資格を会員外へも広げ、編集委員に限定していた査読者を会員全般に広げてピアレビューを導入するとともに、オーサーシップを明記して論文著者としての責任を明確化しました。受理論文を即座に仮掲載するなどWEB版の充実にも努めています。一連の改革は、2020年3月号の巻頭言で細田眞司副理事長(編集副委員長兼務)が述べているように、収載中止の連絡を受けたPubMed(米国国立医学図書館の医学文献データベース)再収載への布石という面がありますが、時代の要請に適った改革でもあります。

改革がめざしているのは、端的に言えばオープン化と民主化への脱皮であり、比喩的に言えば学問の殿堂を開き一般社会に歩みよる方向です。この方向へ進むさいに深慮すべきは研究対象当事者の権利とプライバシーです。現状では症例記述のある論文はWEB一般公開を控えておりますし、司法精神医学領域での同意の扱いなどの課題も抱えています。これらの懸案については久住一郎副理事長(編集副委員長、倫理委員会委員長兼務)が要となって倫理委員会と連携しながら解決を模索しております。

このような一連の脱皮を経つつ、このたびの衣替えに踏み切りました。精神神経学雑誌の歴史と伝統を継承し、さらに発展させるよう編集委員一同鋭意努めてまいります。新たな誌面が、毎号、毎号、多くの優れた論文によって飾られ、会員および関係者に読み継がれてゆくことを心から願っております。